

文化・経済フォーラム滋賀

文化deけいざい 経済deぶんか ニュース&にゅーす第10号(2011年8月12日)

発行 滋賀県文化振興事業団内事務局(大津市京町3丁目4-22 旧滋賀会館内)

TEL 077(522)8369 FAX 077(522)9647

Eメール bunka-keizai@shiga-bunshin.or.jp

事務局 岸野 洋



**文化deけいざい 経済deぶんか
ニュース&にゅーす 第10号**

う猛暑が

節電の夏、それはもう…と思
続いております。10日は大津市内で3

6.9度、11日は東近江市で37.4度でした。お盆入り、会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。ちょっと遅くなりましたが、8月4日にびわ湖ホールで、初めての企画部会と、引き続いての第1回文化経済サロンを開催しましたので、ご報告します。事務局を持ちます文化振興事業団の有田淳さんがメモをとってくれていましたので、それを基に振り返ります。

まず企画部会ですが、出席者は事務局スタッフ
含め21名でした。そうは入れそうにない楕円形
の立派な会議室です。まずは企画部会長の井上建
夫さん(びわ湖ホール理事長・館長)の挨拶です。
内容は▽文化・経済フォーラム滋賀は文化と経済
がコラボした全国的にも珍しい組織であり、手探
り状態であるが、みなさんと手を繋いで進めてい



きたい▽どのようなことを実施していくのかを考えるのが企画部会、案を出していきたい
▽ひとまず文化経済サロンを試しにやってみる。みなさんからご意見いただきながら展開
していきたい▽文化で滋賀を元気にする提言に向けてのスタディの場であり、サロンの交
流で得たものを提言に結びつけていくーというような内容でした。

次いで出席者の自己紹介です。司会はびわ湖ホール事業部長の西川忠雄さんで、小気味
よく誘います。部会のあと文化経済サロンがあり、会議時間は1時間ほどしかありません
でしたが、出席者時計回りと反対で、着席順に発言がありました。以下、皆さんの発言を
紹介します。

麻植美弥子さん(箏奏者)「多様な会員さんがいるフォーラムであり、教育現場に目を向
けて、会員さんが子どもにも向かい合うことができればと思っている。子どもも元気にし
て、フォーラムから夢を与えられるようになりたい。滋賀に生まれてよかったと感じてほ
しい」 隠岐純一さん(大津絵松楓会)「伝統文化の学校伝承活動を実施している。日本よ
し笛協会にも所属し、8月28日に芸文祭事業一発目のよし笛定期演奏会を実施する」

木村世二作さん（詩吟、介護活動）「詩吟をしているが、芸事人口は減少の一途。なんとかしたいと思っている」 野村總一さん（京滋舞台芸術事業協同組合）「滋賀は、文化、文化ーと言いながらスタッフが育っていかない。コンクールを実施して外から人を呼んでくることで、日本全国に滋賀が知れるのではないか」 藤原昌樹さん（彫刻家）・藤原和子さん（洋画家）「9/18～24にCAF.N（コンテンポラリーアートフェスティバル.ネビュラ）びわこ展を大津市歴史博物館で開催する」 村西俊雄さん（愛荘町長）「文化と経済のコラボということに興味を持って会員となった」 待文麻呂さん（伊吹山がまの油口上保存会）「滋賀県の伝統芸能である“がまの油売り”の口上を、保存会として伝承していくことに努めている」

発言内容はもっとありましたが、エキスだけで申し訳ありません。このほか、自己紹介兼ねて発言がありましたが、メモがなく、内容記載のほどご容赦ください。田中正彦さん（しがぎん経済文化センター）石川亮さん（成安造形大学）井上昭栄さん（フラスタジオ・ポハイ・ケ・アロハ）占部敏子さん（県近代美術館）磯間貢志さん（県文化振興課）竹内利孝さん（県文化振興課）江島宏治さん（びわ湖ホール）中村順一さん（経営部会長）

事務局を預かる竹村憲男さんからは、設立総会からの動き、規約、役員名簿、平成23年度事業計画、予算、入会名簿などの説明がありました。



会場は同じびわ湖ホールですが、ミシガンの運行が見える2階研修室へ移っての第1回文化経済サロンが午後6時半からありました。出席は39名でした。第1回文化経済サロンを企画したびわ湖ホールの浅野さんが司会進行です。やはり井上企画部長の挨拶が始まりです。浅野さんが参加者に「私の名前は（ ）で、（ ）から来ました。（どんな仕事・活動）をしています」という書き込み用のペーパーを渡し、後ろの席から順番に前へ前へと発言を求めます。これで、どんな人が参加しているのか、会場に何となく共有感が生まれました。巧みな仕掛けです。講師は滋賀県立大の印南比呂志教授で、「地域におけるアートとデザインの力」と題して、ゆっくり、メリハリを利かした話しぶりです。これも有田メモをそのまま掲載します。



「アート&デザインプロデュース」

・3Cの力 Communication（対話）、Collaboration（協働）、Coordination（調整）
・アートの実践者にはなれなくとも、意識の高い消費者を育てることができる。

・アートは、生活の態度である、モラルや秩序が必要。
・子どもは周りのものを吸い込んで、プロの一流のものであっても同じ子どもの作品であっても同じように感化されて

いく。一流のものに触れることが重要。

「ファンドレイジング」 ・海外の文化関係予算を国際比較すると、日本は低水準。
・アートやデザインは日常の中にあるもの。イベント実施は、日常の中にアートを根付かせるためにする。どういうミッションで活動するか明確にし、イベントが終わった後に日常の中に残るものにする。 ・メセナ活動で社員は会社に誇りを持った。地域に住む人もまちづくりで地域に誇りが持てる。 ・観光とは、日常の普通の生活によその人を入れてあげるもの。普段の生活、雰囲気をおすそわけ。普通の生活の中の豊かさの発掘こそまちづくりであり、地域の活性化である。

「インナミ研究室の活動」 ・信楽トリエンナーレ・ライフセラミックス展 ・近江の夏ここくらし展 ・パッターダ市ナイフビエンナーレ展 ・出版活動、製品開発活動
ほか ・「生活している心地よさってなんだろう」の問いかけから始まる

印南教授は話題提供としての講演でしたが、中身の濃い話でした。司会の浅野さんが会場を見渡して、中村さん、村田さん（スカイプラザ浜大津）を指名して質問を催促しました。信楽トリエンナーレの話に対する質問でしたが、裏話が多く、会場に笑いを誘い、なごやかにになりました。サンドイッチ、唐揚げと缶ビールの立食パーティー、それぞれ名刺交換しながら懇談が続きまして。初めてのサロン、上々の滑り出しでした。会場設営などびわ湖ホール職員さん、文化振興事業団の皆さん、ご苦労でした。 （文責 岸野）